

# 純潔と寛容(一)

本多弘之  
*bonda hiroyuki*

# 啓蒙

宗教的な原理主義が、さまざまな形で現代の最先端の課題のひとつとなっている。自分の所属する宗教に自己のアイデンティティーを求めて、強くその宗教本来の形に依ろうとすることから、現代世界の文明や宗教に対して徹底して抵抗しようとする動きが顕著である。民族紛争にからんでも、宗教的な習慣や習俗の違いが、根の深い闘争心の歴史にまで

なってしまうことのようなのである。バーミヤンの石仏の破壊は記憶に新しいが、こういう場合のように他の信仰表現や考え方に非許容的であることによって、自己の信仰への純潔と自己の所属する民族性や文化への帰属意識を確認しようとするのであろう。

先日、愚生はブラジルで挙行された「世界同朋大会」における基調講演を依頼されて、

それに参加する機会をいただいた。テーマとして「現代と宗教」という課題が与えられていたので、「近代文明の罪障性の自覚」というようなことに的を絞ってお話してみた。

そこでは、近代文明が「啓蒙」(enlightenment)という言葉で代表される「明るみ」への方向で、全世界を引っ張ってきたのであるが、実はその背後に深い闇を潜めていることがだん

だんはつきりしてきたということを使ったのである。

愚生の「啓蒙」に対する批判的な発言に対して、ブラジル人で親鸞聖人の教えに心酔し、京都の東本願寺で得度をされ、現在ブラジルで開教使になっておられるリカルド・マリオ・ゴンサルヴェスさんが、異議をとなえられた。それは「啓蒙」によって、近代社会にもたらされた「自由」の大きさへの評価を強く感じているからだ、ということであった。

愚生の近代批判の焦点は、文明化の影に潜む問題として、科学技術や商業資本による未開発国への侵略や掠奪があるということ。すなわち、いわゆる帝国主義による植民地政策によって奪取してきた豊かさをバックにして、近代社会のいわゆる発展・進歩が支えられてきているのだということ。この構造的な罪障の上に、現代文明の「明るみ」が開かれていることの自覚が必要ではないか、ということにあった。もちろん、人間の罪障性は「無始以来の流転」に基づく「罪悪深重」である、というのが親鸞聖人の自覚なのではあるが、特に現代の「文明化」の啓蒙によって、なにか人間の根本の罪障の問題が忘れられかねない状況を危惧して、あえて私はこういう問題提起を試みたのである。

近代文明の豊かさに付属する罪業とは、政治的な、あるいは経済的な他地域への侵略に

よってその本国は物質的に潤い、社会的な興隆がもたらされたに違いないが、それは他方で属国の貧困と忍従を従えていたということである。しかしながら、その文明のもたらした豊かさは単に物質的な面のみではなかった。科学的な知識による迷信からの解放や、対外的な情況の知識量の増加によって特定の価値観や判断基準が相対化され、習俗や習慣によって、がちちりと組み込まれてきた倫理基準や人生態度が大きく緩められてきたのである。リカルドさんは、現に自分が、いわば他国の宗教であった「浄土真宗」を自分の終生の信仰と自己決定できたのは、この「啓蒙」による宗教的自由が自分の家庭にあったからであると述べておられた。

このことは、「啓蒙」のもたらした明るみが、「寛容」という精神的な態度決定の自由を許容するという面を持っているということである。逆に言えば、自己の価値基準や宗教的信仰内容に対して、「啓蒙」がない状態とは、選択の自由が与えられず、質の違いを排除の原理にするような固さの中にあるということであろう。頑迷と固陋を破るということが、理性の自由な判断の良い面である。その意味では、「啓蒙」による近代の明るみが人間社会にもたらした恩恵は、確かに疑うべくもないところである。

けれどもである。あえてそれを認めた上で、

さらに「啓蒙」の孕む深い罪のことを、自覚するべきであると言いたいのである。いわゆる明るみは、人間の生活上の自由や経済上の豊かさではあっても、人間存在の深みにある罪障までも照らし尽くすことはできない。そのことに気づかずに、「文明と野蛮」という図式で、civilization（文明）の優位を常識とすることには、野蛮を言うこと以上の、存在のあり方についての無神経さがあると思うのである。「啓蒙」の徳とされる「寛容」すら消失させる恐ろしさにもなるのである。

先年、アメリカに行つて開教拠点のお寺（Buddhist Church）で研修会をした時、質問に「なぜ浄土真宗の教えは、ここが暗くなるような自己の罪とか悪とかを強調するのか」ということがあった。これはアメリカのみならず、現代の文明国に共通する感情ではなからうか。人間が明るさを作り、平和で幸せな社会を科学や工業等で生み出し得るといふ、未来への信仰のようなものである。現代の情況をみれば、これが妄念であることはいまさら言うまでもあるまい。仏教は、人間が「煩惱具足」の存在であると見抜いているのであるから……。啓蒙が、どれほど相対的には人間に自由と平等を開いてきたとしても、根源的な罪障までを明るみにはもたらすことはできないのであると知るべきである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）